

令和8年度「品川区学力定着度調査」の結果から 明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区のエ育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1 調査日 令和8年4月14日（火）

2 調査対象 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

3 調査内容

教科に関する調査

→ 調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～5学年> 国語、社会、算数、理科

<第6学年> 国語、社会、算数、理科、英語

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

品川区立戸越台中学校

分 類		7 年				8 年				9 年			
		目標値	校内	区	全国	目標値	校内	区	全国	目標値	校内	区	全国
基 礎		67.4	73.0	72.0	68.7	62.6	72.4	67.1	64.6	59.4	66.8	67.1	64.2
活 用		50.0	57.7	53.9	50.1	51.9	62.4	57.5	52.2	53.8	55.3	59.3	55.1
観 点	知識・技能	69.5	73.6	73.3	70.5	60.0	68.6	62.9	61.6	58.5	64.3	63.7	59.8
	思考・判断・表現	56.7	64.4	61.5	57.5	58.7	69.6	64.8	60.1	60.0	62.3	65.2	62.3

1. 定着状況についての概要
- 《第7学年》すべての領域で全国・区平均を上回っており、基本的な知識が定着している。特に、インタビューの内容の聞き取りや文学的な文章の内容を読み取る問題の正答率が高い。また、思考・判断・表現の観点が高いことから、小学校での考える指導が定着していると考えられる。

《第8学年》すべての領域で全国・区平均を上回っており、基本的な知識が定着している。特に、文学的・説明的な文章を読み取ることや、調べたことをもとにレポートを書くことに関して正答率が高い。

《第9学年》すべての領域で全国平均を上回っており、基本的な知識が定着している。特に、発表の内容を聞き取ることや文学的・説明的な文章を読み取ることに関して正答率が高く、思考・判断・表現の観点別正答率が高くなることにつながっている。一方で、複数の資料を読み取り、自分の意見を書くような活用力に課題がある。
2. 具体的な課題とその原因
- 《第7学年》漢字を書くことの正答率が低いので、漢字の練習について復習の機会が少ないと考える。また、文章を考え、書く問題も正答率が低い。タブレットなどの使用で、書く活動から離れてしまったことが一因かと考えられる。

《第8学年》漢字を書くことについての正答率が低く、漢字を書く機会自体が少なく、日常的に漢字を学ぼうとする習慣がないものとする。また、文法・語句に関する事項も正答率が低い。言語文化に関する知識を知る機会が少ないためと思われる。

《第9学年》文章を書くことについての正答率が低く、無回答率が高い。意見文に対する自分の考えやそのように考える理由を書くことに関して苦手意識をもっている生徒が多いことや、問題文の読み取りに時間がかかる生徒が多いことがと考えられる。
3. 課題解決のための方策
- 《第7学年》継続して「ことのはノート」を活用して、スモールステップで漢字練習および小テストに取り組ませ、基礎的・基本的な知識の定着を図る。また、文法の基礎・基本の復習をできるだけ時間をかけ、丁寧に行うことで、知識の定着を図る。調べたことや考えたことを書いて発表する機会を多く設定し、自己表現する力を育む。

《第8学年》引き続き漢字の読み書き100問テストを授業に取り入れ、基礎的・基本的な知識の定着を図る。また、文法、特に敬語については、2学期の学年の行事である職場体験にも関係してくるため、単元として丁寧に扱い、知識の定着を図る。

《第9学年》新聞のコラム読むことを授業に取り入れ、並行してその場で自身の考えを簡潔にまとめ、書く機会を積極的に設ける。時事問題を取り上げることで、複数の資料を読み取って解釈する機会を増やし、読解力の向上を図るとともに、目的や意図に応じて自分の意見を発信する機会を設ける。自分の意見だけでなく他者との対談を通して多様な意見を認め、相互理解を図ることで合意形成をする上で必要な力を育む。

分 類		7 年				8 年				9 年			
		目標値	校内	区	全国	目標値	校内	区	全国	目標値	校内	区	全国
基 礎		52.9	53.8	53.2	53.0	52.5	54.0	49.8	50.1	51.6	47.4	52.8	50.1
活 用		52.5	57.5	55.9	55.2	45.0	47.2	46.4	44.3	41.9	33.5	38.6	39.0
観 点	知識・技能	50.0	50.1	50.3	50.0	51.4	54.2	50.4	50.6	48.9	44.5	49.7	47.1
	思考・判断・表現	58.0	64.0	60.9	60.6	48.3	47.4	45.2	43.7	49.2	42.5	48.0	47.2

1 定着状況についての概要

- 《第7学年》目標値・区平均・全国平均を上回っている。特に活用と思考・判断・表現の観点においては他の数値と比較して、大幅に上回っている。小学校での学習内容がおおむね定着していると考えられる。
- 《第8学年》校内結果は、基礎・活用、知識・技能の三つで目標値・区・全国の結果を上回り、数値だけを見たら良い結果であった。特に基礎と知識・技能は、非常に高く、7年生の学習内容がある程度定着していたことが推察される。しかし、昨年度の区学力調査と比較すると、ポイントの開きは小さくなっており、やや低迷している。また活用の部分が目標値・区・全国との開きがやや小さく、思考・判断・表現だけ唯一目標値に達していないため、知識を生かした活用や、思考力に課題がある。
- 《第9学年》定期考査など、事前に特定の範囲が決められている場合は点数を取ることができるが、幅広い範囲で出題される実力テストでは、正答率が全国、区内の平均を大きく下回っている。昨年度からの課題である「流れの理解」などが不十分である。また、「活用」の正答率は全国、区内との比較で5ポイント以上の開きがある。学年が上がる毎に数値の開きが大きくなる傾向にあり、7・8学年の学習の定着が不十分であると考えられる。

2 具体的な課題とその原因

- 《第7学年》基礎と活用を比較すると活用が高く、知識・技能と思考・判断・表現を比較すると思考・判断・表現が高い。生徒の授業観察を行った際も、発言や記述等から思考力の高さを感じることができた。一方で、基礎となる知識の定着には課題が感じられた。
- 《第8学年》地理・歴史ともに基礎の定着に留まっており、思考・判断・表現に課題がある。また歴史の方が、正答率が低く、基礎知識では対処できない問題でつまづいていた。現在の課題では思考力が不足しており、7学年での学習を基礎知識のみでしか押さえられていない生徒が一定数いるためであると考えられる。特に、一つの事象が因果関係で結ばれている歴史において、その課題が顕著に見られ、今後対策が必要である。
- 《第9学年》教科の大きな課題でもある単語の「単純暗記」に頼ってしまい、歴史の時代背景や人物が行った政策などの因果関係だと考える。地理の地域的背景（気候や地形、産業など）といった「繋がりや仕組み」を理解できていない点が挙げられる。定期考査の対策として丸暗記するだけではなく、歴史・地理の内容を紐づけて整理し、記述問題や資料読解問題に対応できる応用力を養うことが課題である。

3 課題解決のための方策

- 《第7学年》多くの生徒に社会科に対する前向きな取り組み姿勢が感じられる。流れがつかめていても、一つ一つの用語にあいまいさを感じられる。知識の定着を図ることに重点を置く。くり返し問うことやくり返し解くことに焦点を置き、取り組みを行っていく。
- 《第8学年》暗記一辺倒の学習から、思考力を養う授業を取り入れていく必要がある。そのために、毎授業の「めあて」を達成できるような「問い」を設定して、生徒自身に思考をさせることで、単元を通して時代観や地域を俯瞰して捉えられるようにしていく。定期考査での問題も、暗記で簡単に解けてしまうものを減らして、思考することが大事であると、生徒に伝えていきたい。
- 《第9学年》「流れや仕組みの不理解」と「短期記憶への依存」の解消が挙げられる。そのために白地図や年表を使って「思い出す作業」の学習を大きな単元の終了ごとで行う。また、入試に向け、歴史の相関図や地理の気候や地形、産業など、何も見ずに描き起こす学習を実践させ、確実な記憶の定着と本質的な理解をさせる。

分 類		7 年				8 年				9 年			
		目標値	校内	区	全国	目標値	校内	区	全国	目標値	校内	区	全国
基 礎		64.8	73.0	70.4	65.7	60.2	67.2	66.7	61.1	58.3	61.4	66.3	57.9
活 用		59.3	68.7	65.4	61.6	47.1	52.5	50.1	44.5	44.3	43.8	53.4	45.8
観 点	知識・技能	65.9	73.4	70.9	66.5	59.3	65.1	65.2	59.4	58.3	61.8	66.6	58.4
	思考・判断・表現	58.5	69.0	65.8	61.1	51.3	60.3	56.5	51.4	47.2	46.7	55.6	47.3

1. 定着状況についての概要
- 《第7学年》基礎、活用、全観点、問題別のすべてで校内平均値が目標値・区・全国平均を越えている。分野ごとに
見ると、目標値は全分野で超えているが、「平面図形」が0.6%、「百分率」が0.3%、区平均よりも下
回っている。
また、前年度の7年生（現8年生）と比較して基礎は5.0%下回ったが、活用は5.2%上回っている。
- 《第8学年》基礎、活用、知識・技能、思考・判断・表現のすべて観点で、目標値・区・全国平均を超えている。前
年度の結果よりも、どの数値も上回っているが、分野ごとにみると、「文字式」と「空間図形」におい
ては区平均を下回っている。
- 《第9学年》基礎、知識・技能について、平均が目標値・全国平均を超えているが、活用、思考・判断・表現の観点
が目標値より低い。しかし、対話を取り入れた授業や、小テスト定期的に行うことで、昨年度と比べ、
目標値との差が昨年度は、活用は－2.4 から－0.5 になり、思考・判断・表現については、－2.0 から－
0.5 となったと思われる。
2. 具体的な課題とその原因
- 《第7学年》目標値よりも低くなったのは「平面図形（正六角形の対称の軸の本数）」（目標値－7.0%）と、「比（等
しい比を選ぶ）」（目標値－5.9%）であった。ともに専門用語の定着不足が原因だと考えられる。
- 《第8学年》目標値よりも低くなったのは「回転移動（平面図形）」（目標値－14.4 ポイント）であった。図形の移
動方法を具体的に「言葉で説明する」力が課題である。定期考査でも「説明する」問題の正答率が低か
った。原因としては、計算や図形問題を形として理解しているが、根本的な“なぜ”その解き方で答えを
導けるのかを理解できてない部分があるからと考える。
- 《第9学年》目標値との差が大きい問題は、連立方程式の利用（目標値－6.6 ポイント）。データ分布の傾向（目標
値－5.5 ポイント）。課題として、文章を数式に直せないことが原因として考えられる。また、「箱ひげ
図」については、箱ひげ図を構成する中央値や四分位数の意味の理解が不十分であり、図からデータ
の散らばりや偏りを読み取ることに課題が見られる。
3. 課題解決のための方策
- 《第7学年》『 $12:8=3:2$ という計算はできても、「等しい比」の意味が分かっていない』などのように、専門用語
の定着が必要である。中学校で学習した範囲以外にも、定期的に小学校で学習した専門用語にも触れ
られるよう、授業プリントの工夫やテスト等でのスパイラル学習を行っていく。
また、学力分布が昨年度よりも広いので、習熟度別授業や集団での教え合いなどをうまく使い分け、
下位層を引き上げていく。
- 《第8学年》「問題を解く」や「問題量を増やす」だけではなく、なぜその解き方になるのかを説明できるように、
問題を解くにあたっての思考の質を高めることもできるような授業を展開する。記述問題に取り組む
回数も増やし、数学的な考え方をアウトプットできるようにする。
また、区平均を下回った分野などの復習として、教えあいやICTを活用した授業を取り入れる。知識・
技能の理解・定着を図った授業を行っていく。
- 《第9学年》対話を重視した授業を継続し、入試問題を活用しながら、数量関係を正しく式で表すことを重点に、文
章を数式に表現する力の向上を図る。あわせて、データの分析については、中央値や四分位数などの
基本的な用語の理解を大切にしながら、箱ひげ図の意味やデータ分布の傾向について説明する活動
を取り入れ、読み取る力の育成を図る。また、小テストや単元テストを活用して基礎事項の定着状況
を確認し、理解が不十分な生徒には補充指導を行う。

分 類		7 年				8 年				9 年			
		目標値	校内	区	全国	目標値	校内	区	全国	目標値	校内	区	全国
基 礎		53.3	51.8	51.5	52.3	53.3	60.4	52.3	53.2	49.5	52.9	47.0	47.3
活 用		46.0	48.9	48.2	48.5	44.0	53.0	45.2	46.4	35.5	39.9	35.2	32.4
観 点	知識・技能	52.3	49.1	48.7	50.0	53.3	59.1	50.7	52.3	49.7	54.8	47.2	47.2
	思考・判断・表現	49.3	52.5	52.1	52.0	46.2	56.5	49.2	49.2	38.5	40.2	37.5	36.0

1. 定着状況についての概要

- 《第 7 学年》目標値と比べ基礎分野は 1.5 ポイント下回り、活用分野は 2.9 ポイント上回っている。無回答も多く正答率が低い分野は、腎臓のはたらき、拍動と脈拍など人体に関する分野で、目標値の約半分の正答率になっている。対照実験を含む植物のつくりとはたらきや、てこのつり合い、気体の解けた水溶液、電気の利用については無回答が多く、正答率も低かった。
- 《第 8 学年》基礎分野 7.1 ポイント、活用分野 9.0 ポイントと区・全国平均を上回っている。地学分野は直前に行っていたこともあり、正答率が高かった。物理の作図については演習を行っていても、思い込みで理解が深まっていない。昨年度の目標値と同等程度の結果に至った。
- 《第 9 学年》どの分類も、目標値を 2～5 ポイント上回ったが、昨年度の目標値を 3 ポイント下回った。特に知識の部分は全体的に定着状況が高い。平均と比べて記述も未記入が下回ったのも成果と考える。

2. 具体的な課題とその原因

- 《第 7 学年》小学校の頃、顕微鏡の操作や実験などの経験を積み重ねているが、実際に問題に取り組んで科学的に思考するまでいかなかったのではないかと考える。無回答にしている生徒は質問内容を十分理解していない部分もあるが、知識が十分身に付いていない生徒が多くいると考える。
- 《第 8 学年》密度の計算や屈折角の選択など、第一分野での誤答が目立った。また応用問題として教科書で取り扱っており、かつ授業でも演習を行った問題であっても正答率が低いものもあった。教科書の問題は取り組みやすくするために、出題の工夫が必要と考える。
- 《第 9 学年》誤答が多かった問題の誘導電流、酸化の計算問題は理解に差がある分野なため、演習の時間を十分にとる必要があった。また、顕微鏡の順番についての問題は、「使用するとき致命的な」順番を選ぶ生徒は少なかったため、実験や観察と問題を結び付ける必要があった。

3. 課題解決のための方策

- 《第 7 学年》誤答が多い問題に関しては、中学校の指導内容に含まれるものもあるため、該当する単元では復習から丁寧に行っていく必要がある。さらに日常の経験を科学に結び付けて考えられるように授業で生徒に伝えていく。また、ワークブックなどの演習問題をくり返し解くことで自信をもって記述問題の文章を書けるように指導していきたい。
- 《第 8 学年》繰り返しが多い教科であるため、単元ごとに昨年度の内容を確認し、内容を思い出す練習をさせていく。苦手意識が強い生徒が多い計算問題は特に演習の時間をしっかりと、ワークブックや小テストでアウトプットする機会を多く作っていきたい。
- 《第 9 学年》ワークブックや小テストを活用し、学習内容を早い段階でアウトプットする機会を設けるとともに、授業内で誤答を振り返る時間を確保する。また、記述問題については解答のポイントを具体的に指導し、無回答の減少を図る。さらに、日々の家庭学習の定着に向けた指導を継続する。特に正答率の低かった気象分野と電気分野については、授業の中に復習を取り入れ、理解の定着を促していく。

分 類		7 年				8 年				9 年			
		目標値	校内	区	全国	目標値	校内	区	全国	目標値	校内	区	全国
基 礎		76.5	86.3	86.0	79.4	51.7	66.7	60.5	52.3	54.7	62.7	61.7	53.7
活 用		67.5	74.4	75.3	70.9	48.2	67.8	59.3	48.0	45.9	54.0	55.8	46.4
観 点	知識・技能	80.0	89.0	89.3	82.8	51.2	65.9	59.1	51.4	54.7	62.2	62.3	54.1
	思考・判断・表現	64.7	74.0	73.7	68.0	49.1	69.4	61.9	49.7	47.3	55.9	56.0	47.0

1. 定着状況についての概要

- 《第7学年》すべての項目で全国平均を上回っている。日常会話の理解、英文の読み取り、英作文では区の平均値を下回っているが、概ね小学校での指導が定着していると感じる。特にアルファベットの読み（聞く）、単語の読みに関しては区・全国の平均を上回っており、小学校で行っているリタラシー教育が成果をあげていると考えられる。
- 《第8学年》すべての項目で区、全国平均を大きく上回っている。昨年度、英文の読み取り（聞く）、英作文が区平均を少し下回っていたが、1年間リタラシー活動が続けたことや、生徒自身が「言いたい」「書きたい」と思えるような活動を取り入れたこと、英文の読み取りについては、自身で読むことを意識させ、またペアやグループ活動を取り入れたことが成果につながったと考えられる。
- 《第9学年》すべての項目で目標値、全国平均を上回っている。発表等を通して、読む・聞く・書く・話す4技能をバランスよく学習する活動を継続してきたことの成果が表れていると考える。区平均については、語形・語法の知識・理解、語彙の知識・理解、長文の読み取り、3文以上の英作文については平均を下回っている。

2. 具体的な課題とその原因

- 《第7学年》英文の読み取り（聞く）と英作文は昨年度に続き、区の平均を下回っている。特に英文の読み取りでは2.8ポイント区の平均を下回り、聞いたことについて大まかな内容を捉えることに課題があると考えられる。また、例文を参考にして自分のことについて英作文を書く問題に対しての正答率が低く、自己表現する活動が十分ではないことが考えられる。
- 《第8学年》全ての項目において、区平均を上回っているが語彙の知識・理解、長文の読み取り、情報に基づいて書く英作文については、他の項目に比べて、やや低い。授業で、語彙・知識を目的・場面・状況を意識させ取得できるようにし、その力を長文の読み取りや英作文につなげていくようにいく必要があると思われる。
- 《第9学年》昨年度は並べ替え英作文のみが区平均を上回っていたが、今年は単語の並べ替えによる英作文は1ポイント、場面に応じて書く英作文についても2.8ポイント区の平均を上回った。しかしながら、3文以上の英作文については引き続き区の平均を下回っている。特に、自分の考えや意見をまとめた内容で紹介する英作文の正答率が低い。事実を伝える表現は定着してきているものの、概念を伝える表現の定着が不足しているためと考えられる。

3. 課題解決のための方策

- 《第7学年》小学校で培った文字と音の関係を定着させるため、継続してフォニックス指導を毎授業で行い単語力、ライティング力を向上させる。英作文については、学習した英語構文を生徒自身にあてはめて使う機会を単元ごとに設けることで、自分の言葉で表現する習慣と技能を学年末までに身に付けさせる。
- 《第8学年》7年生までに習得した語彙・知識を復習しながら、「目的・場面・状況」を意識させ、自分たちが書きたいと思えるような英文を書かせる活動を行う。英文の読み取りでは、音声化できるだけでなく、どのように問いに答えていくかを意識したワークシートを作成し、まずは教科書の内容をきちんと理解させる。
- 《第9学年》既習事項を確認しながら、書く活動を授業内で継続して行う。2学期以降は副教材を利用して、3つの英作文を書く練習に取り組み、翌年1月末までに3つの英作文を書く練習を継続して行う予定である。添削・修正させることで、自分の考えや意見をまとめた内容で紹介する表現、概念を伝える表現についても定着させる。